

「不寛容社会に思う」

器量

Vol. 32

近年、ITの進化は著しく、全ての分野で、そして地球規模というより宇宙規模で瞬時にあらゆる情報が飛び交い、長い年月と努力の中で育ててきた技術やノウハウがまたたく間に模倣され、且つ何らかの価値を添付してビジネス化され、多く利益を出した者が勝者といった時代となってきています。

ユーザーにとっては、利便性や効率化も含めプラスの要素も多い反面、愚直な努力が軽視され、仕事を通じて自己を磨くといった「本質的な徳性」より、「表面的な才」を競う浮薄な傾向が極めて強い時代となってきている様に思います。

強さばかり競う社会では、果たしてそれが正道であるか邪道であるかより、勝つか負けるか、損か得かだけが評価の基準となりつつあり、果たしてこうしたトレンドの行きつく果ては、逆境の時代には対応出来ない人達を量産し、ひいては国家の破綻、人類の消滅まで行きつく気がするの私だけでしょうか。

価値観の急激な変化は、今迄に行われてきた慣例も無視され、新しい事が全て正しいかの様な捉え方をされ、それと異なる事は全て否定してゆく、いわゆる極端な「不寛容社会」を生み出してしまっている様に思います。

一強多弱の政治は、日本人が過去何世代にもわたって育ててきた、至誠、勤勉(勤労)、分度、推譲という美徳さえ否定し、働き方革命という名ばかりの政策を強制し、日本社会から真の技術者や研究者あるいはプロフェッショナルが育たなくしている事は、将来の日本を考えた時に、戦慄するような愚策だと思っています。

そもそも仕事に対する価値観・モチベーションはそれぞれ異なるものであって、自分の仕事が好きで打ち込んでゆく人達こそが、時代を牽引するイノベーションを創ってきた訳で、官がそうした事を無視して画一的な枠の中で入れようとする事自体が、偏狭な横暴とっています。

かつて「ゆとり教育」で大失敗した事を何も教訓とせず、日本人から勤勉さを削いでいく愚かな政策が、将来の日本にとって取り返しのつかない結末になった時、果たして今の政権担当者は責任がとれるのでしょうか。

本人が望まない過重労働や未払い残業等の是正は当然やっつけべきではあっても、それぞれの自己責任で行う仕事の仕方や生

き方に、第三者が口を挟み過ぎる今日の社会は、正常ではないと思っています。

人間は不完全で未熟な生き者だと思います。その不完全を自覚して努力する事こそが、人間を、そして社会を成長させる原動力である筈です。

不完全な人間は失敗もするし、判断が間違ふ事もある訳で、その事を反省しながら成長してゆくのではないのでしょうか。

今日の社会は自らも不完全な人間である人達が、自己の成長に時間とエネルギーを割く事もしないで、他人の失敗をことさらに大きく、また面白おかしく話題としている事が多過ぎる様に思います。

「小人閑居して不善を成す」という言葉も有ります。我々は閑になりすぎると、どうでもいい事が気になったり、横道にそれる行動をとる傾向にあると思います。

今日、我々が意図しなければいけないのは、まさに自助(Self Help)の精神であって、限られた有限の人生の中でもっと自己を高め、社会に貢献出来る自分にしてゆく努力をそれぞれがする事だと思っています。

情報過多で「本質的徳性」より「目先の利」を競う世の中で、自分本位の価値観を声高に主張し、他人の非を責めたり、この行き過ぎた「不寛容社会」を、皆がもっと真剣に正してゆく様にしたいものです。

春 3月・・・・・・・・・・
季節は冬から春へと確実に移り変わり、こうした恒久の春夏秋冬の季節の変化の中で、有限の人生を生きる我々は、こうした時代にこそ時代に流されない心の余裕を持ちたいものです。最後に私の敬愛する、故坂村真民先生の詩を記しておきます。

徳真会グループ
代表 松村 博史



故坂村真民先生の詩

念ずれば花ひらく

念ずれば
花ひらく

苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

花は歎かず

わたしは
今に生きる姿を
花に見る
花の命は短くて
など歎かず
今に生きる
花の姿を賛美する
ああ
咲くもよし
散るもよし
花は歎かず
今に生きる

鳥は飛ばねばならぬ

鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ
怒濤の海を
飛びゆく鳥のように
混沌の世を生きねばならぬ
鳥は本能的に
暗黒を突破すれば
光明の島に着くことを知っている
そのように人も
一寸先は闇ではなく
光であることを知らねばならぬ
新しい年を迎えた日の朝
私に与えられた命題
鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ